

樹液って面白い

子どもの好奇心は、保育者の意図を込めた環境の中であっても、予想とは違う対象に向けられることがあります。この事例の子どもたちは、隣接する公園での体験を何年も楽しんでいる保育者が予想もしなかった「樹液」への好奇心により、自然と向き合い関わる質の高い体験をしています。

この事例から読み取れるように、「科学する心」が育まれると、子どもたちは自分たちで見通しをもったり、「～したい」と次にすることを考えて取り組んだりします。それは、子どもたちが自ら実現したい発想や解決したい問題をもつからです。

子ども（4歳児）

めるへんの森幼稚園

昨年、公園で「木が鼻水出している」と不思議に思い、樹液遊びに夢中になった子どもたちが5歳児になった。その5歳児に刺激を受けた4歳児が、樹液への関心を深めた。当初は、樹液そのものへの興味で、観たり触れたり嗅いだりして様々な感覚で楽しみ、樹液を集めていた。

展開1 [いろいろな樹液発見]

6月

桜の木の樹液を楽しんでいたが、次第にいろいろな木を見て周り、繰り返し見たり触ったり採ったりすることを楽しむようになる。

樹液を見付け、「キラキラの木があるよ」と興味をもったり、「黄色いのもあるよ」「茶色のもあるんだよ」と気付いたりする。「のりみたい」「やっぱり鼻水みたい」「ハチミツみたい」「たらしんの木だね」などと、思い思いの表現で感じた性質や状況を話す。



いろいろな木に視線も興味も向き、何度も触ったり集めたりして樹液の感触を楽しみ、色の違いや樹液の垂れている様子など新たに気付いたことを伝え合って共有している。

展開2 [カブトムシのために樹液を集めたい] ⇒問題 樹液がない

6月

クラスで育てているカブトムシの幼虫が、サナギになる準備を始めたことに気が付く。喜ぶ子どもたちは、**カブトムシになると何を食べるのか考える**。「カブトムシゼリー」「樹液も食べるよ」「カブトムシのために樹液を採ってきてあげたい」と話し合い、**樹液を集める**ことになる。

園の裏庭や公園に行って探したが、樹液はあまり出ていない。

- こうへい 「雨いっぱい降ってたから樹液べろーんって出てると思うよ」
 きょうたろう 「樹液は木の中の氷だから、晴れたから溶けて出てきてと思う」
 よしのり 「暑くなったからいっぱい出てるんじゃない？」

[予想]
 [予想・想像]
 [予想]

展開3 [樹液レストランを作りたい] ⇒問題解決 樹液を作ろう

7月

「樹液がないのは何故か？」話し合い、**虫たちのために樹液を作る**ことが話題になる。園では絵本『じゅえきレストラン』（ふしぎいっぱい写真絵本、文・写真 新開孝 ポプラ社）を楽しんだり、家庭から情報を聞いてきたりする。そして、みんなで考えた材料 [リンゴ、アイス、ハチミツ、バター、綿あめ、バナナ、黒砂糖、焼酎] を集める。

材料は、焼酎以外全部混ぜる。作り方では、「樹液はトロトロだからトロトロにしよう」と言い、バナナはフォーク、リンゴはすりおろし器を使い作る。作った樹液と本物の樹液を比べる。虫になったつもりになり味見をする。**話し合い 作った樹液を木に付ける**。



翌日、雨の合間に裏庭で**観察する**。なくなっている樹液がある。アリが食べているところを見付ける。硬くなっている樹液がある。

- はると 「アリは食べてたけど、カブトムシはいなかったね」 [気付き]
 こうへい 「どうしてカブトムシは食べないのかな？」 [疑問] ⇒自分たちで解決へ



[明日は] 「カブトムシが喜ぶ樹液を作りたい」という新たな目的をもち、挑戦する。
 材料を考えたこと、考え合って作ったこと、味見したことを思い出し、みんなで取り組む。

「科学する心」が育まれると、子どもたちは思いや目当てをもって遊ぶようになるので、保育者は、子どもが自分たちで遊びへの思いを実現できるように、環境を構成する必要があります。子どもたちが考えた見通しや柔軟な発想を表わし、具体的な行動ができるように援助することが大切になります。実現するために、子どもたちが自ら存分に関われる環境を構成することが求められます。

保育者（子どもたちの話し合いを大切に）

めるへんの森幼稚園

昨年の4歳児は、樹液との関わりが充実していた。5歳児になった子どもたちは、樹液に興味をもった4歳児に樹液について伝承している。保育者は、樹液に関わる遊びを見守ろうと考えた。

援助1【感じたことを引き出す】 ⇒子どもの姿を読み取って 5月

子どもたちは公園で樹液を探し、見付けると喜んで触ったり見たりする。そこで、実際に触ったり匂いを嗅いだりした子どもの**言葉を引き出し、感じたままに表現することで樹液の魅力を楽しむ援助**をする。



◎色の違い

きょうた 「キラキラの木がある」
ゆい 「黄色いのもあるよ」
ありさ 「茶色のもあるんだよ」

◎性質

樹液で葉っぱが付いている木の枝を見付けて…
こうへい「のりみたい」

◎状態

とうま 「やっぱり鼻水みたい」
みおん 「ハチミツみたい」
きょうた「たたりんの木だね」

見つけた友達の話しを聞いて伝え合うようになる。友達同士で共感する姿が増える。P.32 展開1

援助2【探求心を刺激】 ⇒子どもの言葉をきっかけに

ひなた君が「先生、どうして樹液は出るの?」と保育者に聞いてきたので、**そのことを、クラスの集まりに投げかけた**。「木にカブトムシが来るから作ってるの」「カブトムシが作っていったのかな」「メスがお料理して作ってるんだよ」「鼻水じゃない?」「カブトムシが作ってるから木の中にいっぱいあるんじゃない?」「カブトムシの足がカリってやると樹液が出てくるんじゃない?」などと話し合う。



そこで、保育者が「どうやったら樹液がたくさん採れる?」と問いを投げる。

いろいろな方法を試して釘で樹液を取る方法を知り、夢中になる。カブトムシの幼虫がサナギになるうとしていくことに気づき、「カブトムシのために樹液を採りたい」という提案が出る。

みんなが賛同して園庭と公園に取りに行き、虫が食べるか否か更に樹液を観察する。P.32 展開2

援助3【新たな発想を引き出す】 ⇒活動の停滞を把握し刺激になる情報を提供する 7月

帰りの集まりで、絵本『樹液レストラン』を読み聞かせる。興味のある樹液の話に「樹液だ!」と喜ぶ。いろいろな虫が集まる様子に、驚いたり感心したりしながら見入っている。**絵本により得た新たな気づきが、その後の話し合いで引き出されて新しい発想が生まれ、「樹液レストラン」を作ることになる。**

『じゅえきレストラン』で“樹液には葉っぱの栄養分がたっぷり”って書いてあったから、樹液は葉っぱでできている」「でも、樹液は茶色だけど葉っぱは緑だから」「みんなも虫に変身して、美味しい樹液レストランを作ろう」「木に塗って虫が来るのを待とう」と話し合う。

樹液は何んでできているのか材料を考えて準備し、虫のことを考えて樹液を作る。P.32 展開3

【明日は】

読み取り: 子どもたちは五感を土台にして自然の中で考えを深めている。

明日の保育に向けた援助: 子どもたちに芽生えた目的達成のために、保育者は答えを急がず、「とことんのめり込む時間」「思う存分試せる環境」を作っていく。